

第4章 「陰獣」論

第1節 「陰獣」の構造分析 —「探偵小説」の三要素についての考察—

はじめに

「陰獣」は寒川という名の「探偵小説」作家による一人称形式の語りであり、回想の手記を織り交ぜて物語が進められている。この寒川を中心に事件が描かれているが、彼は二度も自分の推理を覆している。最後は一見謎が解かれたように見えるが、彼は依然として自らの推理が正しいかどうか断定できずにいた。結局、犯人の正体や手法などは完全に解明されないままに物語が終わってしまう。そしてこの作品の最大の魅力は、二度のどんでん返しにあり、物語が進むにつれ、主人公は自分の推理を修正していく所にあると言えよう。このような「探偵小説」の構成は当時においてきわめて異質であり、また謎を解明しない結末も大量な批判を招くことになった。

しかし乱歩はこれらの批判に対して、桃源社出版『江戸川乱歩全集』の「あとがき」において次のように弁明している。

この作は賑やかな批評を受けたが、それらの批評の多くは、結末に疑いを残したことを非難していたので、その後の版で、私自身、疑いの部分を削ってしまったことがある。しかし、やはり原形の方がよいと考えるので、この本では、最初発表したときの姿に戻しておいた¹。

以上の引用を見ると、乱歩は一度謎を残した結末を削除したが、やはり原型のほうがよいと考え、桃源社版の『江戸川乱歩全集』に収録された際に初版の形に戻したのである。乱歩はなぜ謎が深まるような結末を選んだのか。また、このような構成と乱歩自身が定義した「探偵小説」三要素、つまり発端の不思議性、中道のサスペンス、結末の意外性という見解と何か関連性があるか。この第1節では「探偵小説」の三要素を中心に上述の問題点を検証してみたい。

¹ 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第3巻 陰獣』光文社、2005年、pp.674-675。

1. 発端の不思議性

筆者は第2章「人間椅子」論、第3章「屋根裏の散歩者」論で二つの作品の発端における不思議性を検証した。例えば椅子の中に隠れ、触覚と聴覚、嗅覚を通して人々と接触するような体験を描く「人間椅子」、または主人公の異様な飽き性と犯罪欲を描く「屋根裏の散歩者」、二作とも乱歩自身が言うように「奇抜な着想で好評を博した作品²」である。特に「屋根裏の散歩者」に関しては、「当時の批評家平林初之輔さんは、自分の家の天井裏を歩きまわって、その体験を小説に書いた作家なんて、古今東西に例がないだろうと、私が不思議な作家であることを強調したものである³」と、乱歩自身が記しているように、屋根裏を歩きまわるといふ発想はかなり斬新的であった。つまり着想の不思議と奇抜さが「人間椅子」と「屋根裏の散歩者」が、人気を集める理由の一つである。

それでは「陰獣」の場合はどうだろうか。「陰獣」の焦点人物は寒川という探偵作家で、彼はこの作品の主人公でもある。寒川は博物館で実業家・小山田六郎の妻の小山田静子と知り合いになり、その時、寒川は静子を「古めかしい油絵の聖女の像」(p.563)と評価している。しかし寒川は同時に彼女の項に妙なあざを発見した。それについて次のような一節がある。

彼女の項には、恐らく背中の方まで深く、赤痣の様な太い蚯蚓脹れが出来ていたのだ。それは生れつきの痣の様にも見えたし、又、そうではなくて、近頃出来た傷痕の様にも思われた。青白い滑かな皮膚の上に、恰好のいいなよなよとした項の上に、赤黒い毛糸を這わせた様に見えるその蚯蚓脹れが、その残酷味が、不思議にもエロティックな感じを与えた。それを見ると、今迄夢の様にも思われた彼女の美しさが、俄かに生々しい現実味を伴って、私に迫って来るのであった。(p.563)

静子は「上品で優しくて弱々しくて、触れば消えてしまいそうな美しい人」(p.563)であるが、「赤黒い毛糸を這わせた様に見えるその蚯蚓脹れが、その残酷味が、不思議にもエロティックな感じを与えた」ような傷痕を自分の項に残して

² 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第1巻 屋根裏の散歩者』光文社、2004年、p.552。

³ 注2前掲書参照、p.552。

いる。なぜこの上品な女性の項に不似合いな痕が残っているのか、この不思議な傷は「陰獣」の中核に係わる重要な鍵となり、また作品の展開を暗示する一つの伏線でもある。そして静子も持っている不思議な雰囲気と、いかにも何か事情がありそうな言動は、物語の発端部に不思議性を与えている。

2. 中道のサスペンス

2.1 大江春泥（平田一郎）の行動

寒川と知り合った静子は、大江春泥という探偵作家から脅迫されたことを寒川に告げ、そして大江春泥の本名が平田一郎であることを告白している。平田一郎は静子の昔の恋人であったが、静子は本気で彼と付き合ったわけではないので、のちに彼と別れた。しかし平田一郎は静子にうるさく付き纏い、さらに気味の悪い脅迫状を彼女に送りつけた。恐ろしくなった静子はその後に転居し、平田の執念から逃れようとした。その後、静子と同じ村の出身者である小山田六郎が彼女の前に現われた。小山田六郎は静子に深く恋し、静子も小山田のことが嫌いではなかったため、二人は間もなく結婚した。そして7年後の今、静子は突然に平田一郎に脅迫状を送られたのである。

平田一郎は復讐のため、静子を尾行し、彼女の家を突き止めた。そして最初の脅迫状で平田一郎はわざとこのことを静子に伝えている。しかし最も恐ろしいのは彼の復讐事業であり、その内容は次の一節のようなストーカー行為の数々の詳細な記録である。

午後七時より七時半まで、君は君達の寝室にあてられている部屋の小机に凭れて小説を読んだ。小説は広津柳浪の短篇集「変目伝」その中の「変目伝」丈けを読了した。七時半より七時四十分まで、女中に茶菓を命じ、風月の最中を二箇、お茶を三碗喫した。七時四十分より上廁約五分にして、部屋へ戻った。それより九時十分頃まで、編物をしながら物思いに耽った。九時十分主人帰宅。(中略) 晩酌が終るとすぐ女中に命じて二つの床をのべさせ、兩人上廁の後就寝した。それから十一時まで兩人とも眠らず。君が再び君の寢床に横わった時君の家のおくれたボンボン時計が十一時を報じた。

君はこの汽車の時間表の様に忠実な記録を読んで、恐怖を感じないでいられるだろうか。(pp.572-573)

以上の一節から、静子の生活すべてが平田一郎に監視されているということがわかる。さらに夫との寝室の秘密までも暴かれ、このことは静子に甚大な恐怖を与えた。そして二通目の脅迫状で、平田一郎は自分が影のように静子を覗き見ることを告げている。しかしそれはどこで、どのようになされているのか、平田一郎は明さなかった。これは逆に見られる側の静子の恐怖心を煽り立てる。さらに平田は小山田夫婦の命を奪うとも予告した。このように小山田夫婦の行動をすべて把握した上、小山田六郎夫婦の命を奪うと宣告した平田一郎の脅迫状は不安や緊張感を煽りたて、猟奇サスペンス的な雰囲気醸成している。

このように平田一郎の脅迫状はサスペンス性を漂わせているが、それだけでなく、平田一郎つまり大江春泥の行動も一般人が理解できる限度を超えていた。彼の不可解な行動からいくつか次の表（一）に挙げ、論じることとする。

表（一）大江春泥（平田一郎）の不可解な行動 ※筆者作成

大江春泥（平田一郎）の不可解な行動	ポイント
①大江春泥は四年ばかり前、突然に現れた探偵作家である。春泥が処女作を発表すると、大好評をもらって、一躍して読書界の寵児になってしまった。しかし春泥は一年ばかり前から、人気は衰えた訳でもなく、突然に行方不明であった。	人気は衰えたわけではないが、行方不明になった
②大江春泥の作風が常に、猜疑心、秘密癖、残虐性を充滿している。春泥はさらに小説の中で、小説を書くだけではもう自分の異常な空想が満足できない、ただ一つのが自分の欲望が満足できる。それは犯罪であると無気味な言葉をさえ洩らしていた。	小説の中に異様な犯罪欲を洩らしている
③大江春泥の厭人病と秘密癖は、作家仲間や雑誌記者の間に知れ渡っていた。それに春泥はよく転居し、作家の会合などにも顔を出したことがない。噂によると、春泥は一日中床の中に寝そべって、食事、執筆などすべて寝ながらしている。そして昼間も雨戸をしめ切って、わざと五燭の電燈をつけて、薄暗い部屋の中で創作する。	不可解な生活スタイル

平田一郎は大江春泥というペンネームで自分の作品に「猜疑心」「秘密癖」「残虐性」(p.578)をこまかに描き、その独特の作風で人気を博したが、一年ぐらい前に突然に行方不明になった。彼はどこに隠れているのか、そしてなぜ行先をくらましたか、まず一つの謎として提起される。

また大江春泥の作品の中には、犯罪者の異常心理が生き生きと描写されている。そして犯罪者が他人に与える恐怖心や残虐な行動もリアルに描かれている。一通目の脅迫状で、大江春泥が、猜疑、執念、残虐などに満ちた犯罪者の心理を作品に描いたのは、静子への復讐心から生まれたものと述べている。脅迫状が誰かの悪ふざけではなく、本当にかつての恋人からの悪意に満ちた復讐であることが、静子の不安を煽り立て、彼女を恐怖の底に陥れる。

大江春泥自身の日常生活も謎だらけである。寒川の聞き込み調査で分かったことであるが、本田という外交記者は浅草公園で大江春泥の道化姿を目にしたことがある。なぜ春泥が道化姿を扮したのか。そして春泥が目撃された時期は「丁度第一回の脅迫状が来た時分らしかった」(p.583)。そうになると、脅迫状の犯罪予告の真実味も帯びてくるのである。

以上に見てきたように、大江春泥という人物は意図的に謎めいた人物として描かれている。このような人物設定と、恐るべき内容をもつ脅迫状は、得体のしれない恐怖を有するものとして提示されている。

2.2 段々と深まるサスペンス

二通目の脅迫状を読んだ寒川は静子の家を調べたが、手掛かりはなかった。その後、小山田六郎はやはり脅迫状の予告通りに命を落した。小山田の死はとも突然であるが、もっと恐ろしいのは、小山田六郎が死んだ夜に、静子がもう一度大江の影を見たという証言である。その場面描写には次のような一節がある。

静子はその時の怖かったことを思出した様に、目を大きく見開いて、ポツリポツリと話すのであった。「昨夜は十二時頃、ベッドに入ったのは入ったのですけれど、主人が帰らないものですから、心配で心配で、それに天井の高い洋室にたった一人でやすんでいますのが、怖くなって来て、妙に部屋の隅々が眺められるのです。窓のブラインドが、一つ丈けおり切っていないで、一尺ばかり下があいているので、そこから真暗な外の見えてい

るのが、もう怖くって、怖いと思えば、余計その方へ眼が行って、しまいには、そこのガラスの向うに、ボンヤリ人の顔が見えて来るじゃありませんか」(p.604)

二通目の脅迫状において、大江春泥は小山田六郎の命を奪ってから、静子の命も狙うと宣言している。もし上の引用にあるように静子が見た「ボンヤリ人の顔」が本当に大江だったら、静子の命は窮地に立たされるということになる。大江春泥が捕まり、あるいは静子が殺害されるまで、この緊張感はずっと続くのだろう。

以上に見てきたように、脅迫状と大江春泥の異常な行動もそうであるが、読者の興味を引くために不安や緊張感などのサスペンス要素が随所に仕掛けられていることがわかる。静子の家に現われた不思議な影など謎めいた展開にしたがって、サスペンスはますます盛り上げられていくのである。

3. 結末の意外性

乱歩が主張する「探偵小説」三要素のうち、「陰獣」における発端の不思議性と中道のサスペンス性は以上の通りであるが、この小節では結末の意外性について考えたい。結末の意外性は「探偵小説」の構成においてとても重要な要素である。本論で取り上げた「人間椅子」「屋根裏の散歩者」などの作品も読者の意表をつくような結末が用意されていた。そして、「陰獣」も例外ではない。

寒川は最初は真犯人が平田一郎と考えていたが、ストーリーが展開して行くにつれ、寒川は自分の推理を覆し、真犯人を静子と考えるようになった。寒川は小山田六郎の死により、脅迫事件が一件落着と考えていたが、いくつかの疑点を発見し、もう一度調査を始めた。小山田家の運転手と灰汁洗い屋の証言をもって、静子こそ真犯人であると推測した。寒川が静子に彼女こそが真犯人ではないかと追及すると、静子は何も答えずただ泣くばかりで、翌日に自殺したのである。この結末にはどうしても説明しがたい点が二つ残されている。一つは静子が本当に黒幕で、自分の夫を殺した真犯人なのか。もう一つは静子の唐突すぎる死である。

「探偵小説」の犯人は身分が暴かれた時に、多少なりとも自分のために弁解をする。しかし静子は寒川に責められても何の弁明もせず、そして翌日に自殺をしたのである。そして静子が死んだ翌日の夕刊で、ある新聞記者は静子の死

について「小山田夫人は恐らく、夫六郎氏と同じ犯人の手にかかって、あえない最期をとげたものであろう」(p.664)と新聞に書いている。この記事を読んだ寒川は自分の推理を次のように省みている。

様々の証拠が揃っていたとは云え、その証拠の解釈は凡て私の空想であった。二に二を加えて四になるという様な、厳正不動のものではあり得なかった。現に、私は運転手の言葉と、灰汁洗い屋の証言丈けを以て、あの一度組み立てたまことしやかな推理を、様々な証拠を、まるで正反対に解釈することが出来たではないか。(pp.664-665)

以上の一節を見ると、寒川は自分の推理を支える証拠が薄く、他人の証言だけをもって、真犯人を静子と決め付けるという自分の推理過程の盲点に気付いた。また静子の死因について、寒川はそれが自殺と考えているが、上述の新聞記者は静子の死を他殺によるものと推測している。記事を読んだ寒川は、自分の推理が正しいかどうか不安になり、そして静子の死がもし自殺なら、自分こそ静子を死まで追いやった張本人なのではないかと、後悔と疑念に満ちた。このように、「陰獣」はいくつかの謎を残し、未解決のままに物語は終る。しかしこのような謎のままに終わった結末はより強く読者の心に印象深く刻み込まれるだろう。

おわりに

この一節では、乱歩自身が定義した「探偵小説」の三要素を中心に「陰獣」の構造を検証した。以上の分析をまとめると、以下のようになる。

女主人公の静子の項の不思議な傷痕は、「陰獣」における発端の不思議性の代表的な伏線の一つである。そして脅迫状に記されている復讐の行為や、大江春泥の異様な生活スタイル、及び静子の家に現われた不思議な謎の影の描写は中道のサスペンスの雰囲気醸し出している。静子の唐突すぎる死と、彼女が真犯人なのかどうか謎であるという結末も意外性のある終り方である。

寒川を焦点人物とする謎解きの過程の中には不確定の要素が多く、確証たるものが少ない。さらに事件の経緯は寒川による一人称の語りであり、しかもそ

の語り手が「信頼できない語り手⁴」(unreliable narrator)であるために、作品全体にミステリー性がより強く表現されている。そして寒川の推理は彼の推測の域を出ないということである。このような真相不明のままの結末「探偵小説」が批判を招いたことは最初にふれた通りであるが、乱歩は『探偵小説四十年(上)』において、井上良夫の「陰獣」評を次のように記している。

探偵小説的サスペンスの強さに於て、先ずあの作は比類なく傑れているだろう。屢々記したことであるが、探偵小説のサスペンスとは、単に謎の解決に対する期待、というだけでなく、読者が筋の発展の方向、或いは、ある推理臆測をおぼろげに予測することによって生ずる期待にみちた一種の不安、気懸りである。それには作者の側からの適度な暗示が必要である。この暗示は、或いはそれが組立て上の妙味となって、事件そのものの推移の上に現われ、或いは、片言隻句の中の証拠、手掛りの形となって、読者の眼前に提出せられるのであるが、その配列の巧拙は、直ちに読者へのサスペンスの強さに、大きなひらきをつけてしまうのである。読者に効果的な暗示を与える手法は、「陰獣」の全篇に亘って、殆んどその一つの型が完成されている⁵。

以上の引用が示すように、井上良夫は「陰獣」のサスペンス性の高さを評価し、「作者の側からの適度な暗示」において、「陰獣」の完成度が非常に高いと述べている。

以上は構造面からの分析であるが、冒頭部の静子の身体の描写から伝わる不思議性と、大江春泥の異様な行動描写から醸成する緊張、恐怖の雰囲気、そして終盤における静子の意外な死などを見ると、作中人物の身体描写と心理描写を通して、不思議性、サスペンス、それと意外性が醸し出されると言える。これらの点から見れば、乱歩の作風の特徴としての身体描写と人物造形の巧みさが本作品にも遺憾なく発揮されていると言えよう。次の第2節ではマゾヒズム、そして第3節では人物造形を取り上げて論じることとする。

⁴ 廣野由美子『批評理論入門「フランケンシュタイン」解剖講義』、中公新書、2005年、p.25。

⁵ 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第27巻 探偵小説四十年(上)』、光文社、2006年、pp.350-351。